



武蔵野市水環境連続講座「水の学校」とは

「水の学校」は、市民のみなさんといっしょに、水を知り、考える連続講座です。くらしの中の身近な水循環、下水道の役割や、水に親しみ水を楽しむ知恵、そして世界規模の水課題、地球規模の水循環まで、水を取りまくさまざまなテーマを取りあげ、楽しみながら考えを深め、行動へつなげます。2014 年度からスタートし、2 年目を迎えました。

第 3 回 武蔵野市の水はどこから？

連続講座レポート

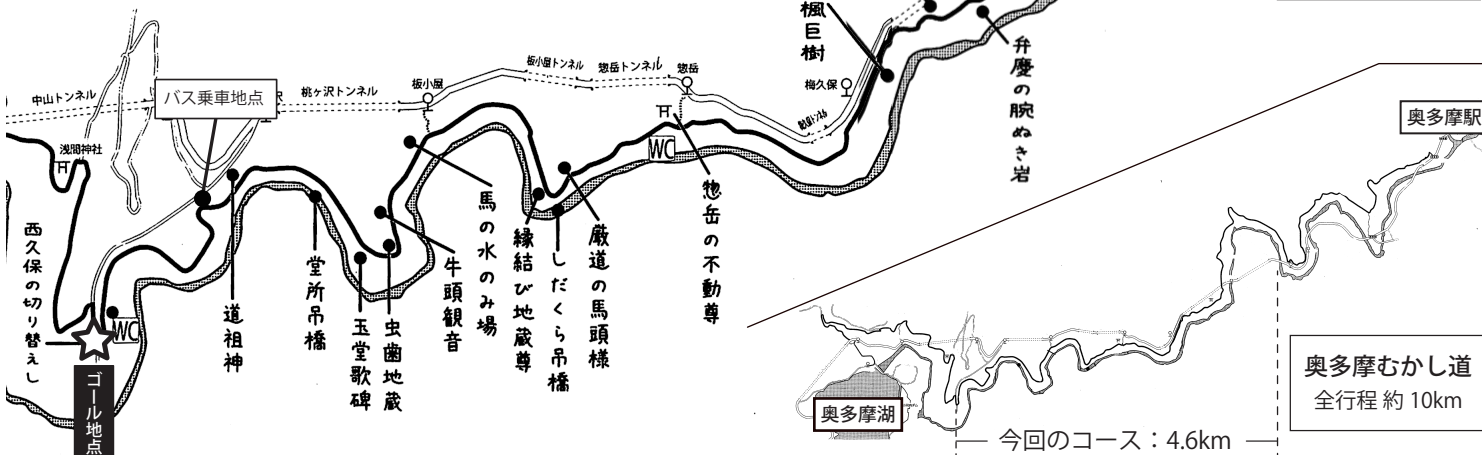
～水を育む森の「むかし道」を訪ねよう

雨続きだった前日から一転、雨も上がって程良い気候となった 9/5（土）、受講生 27 名に一般参加者、サポーター、関係者を含む総勢 50 名で奥多摩町を訪問しました。

武蔵野市の水道水は、原水の約 8 割が市内 27 カ所の深井戸から汲み上げた良質な地下水で、そこに東京都の浄水場から受水した水をブレンドしています。

私たちが普段飲んでいる地下水は、奥多摩の森林などに降った雨が地下に浸透し、ゆっくりと流れてきたものです。

武蔵野市の上水道の詳細は News Letter vol.2 をご覧ください。



歴史と自然を体感する「むかし道」

今回散策した「奥多摩むかし道」は青梅街道の旧道で、奥多摩駅周辺の「氷川」から現在的小河内ダムまでの区間がむかし道として整備されています。1938（昭和 13）年にダム建設が着工し道は途切れましたが、1899（明治 32）年から改修を重ねながら交易の道、生活の道として使われていました。

この日は渓谷を流れる多摩川を見下ろしながら、4.6km の道のりを 4 つのグループに分かれ、現地ガイドの案内で歩きました。道中では当時の人々のくらしの名残や往来の商人が泊まっていた宿泊施設の跡、馬の水飲み場などを見ることができました。

「白髭神社」には、高さ 30m 幅 40m の石灰岩の断層面の露頭があり、その斜めにせり出ている様は迫力満点でした。「石灰岩はサンゴや貝が積み重なってできることから、2 億年くらい前までは奥多摩も海だったことがわかる」と

いうガイドさんの話に、参加者のみなさんも大きな時の流れを感じているようでした。石灰岩には小さな気泡の穴が空いていることから、小さな石は耳の病気の快癒を祈って「耳神様」に祀るためにも使われていたそうです。

現在も街道沿いにくらす人々の生活や昔の人々のくらしぶりを垣間見て、森の豊かな植生を楽しみながら歩いた、あっという間の 4 時間でした。

参加者の声より

- 奥多摩と武蔵野市が密接に関わっていること、奥多摩の樹々がきれいな水の素になっていることを知り、離れていても大事にしなければと思いました。
- 自然の中での水循環だけでなく人々のくらしの歴史も知ることができました。
- ずいぶんと遠くから飲まれにきていると思うと大変心苦しくなりました。



水コラム no.10: 武蔵野市の森林整備の取り組み

森には様々な役割がある

森林には、土をその場に留めて水をたくわえる働きがあります。雨水は土にしみ込む過程でろ過され、良質な地下水となります。木々を植えて育てる林業の場でもあり、山のない武蔵野市の市民が山歩きなどの余暇を楽しむ場ともなっています。また、森の土の養分がとけ込んだ水は川を経て運ばれ、海の生きものを育むなど、広く私たちのくらしに恵みをもたらしています。

恩恵を受ける私たちができること

奥多摩の森は約 6 割が人工林です。しかし、高度成長期以降は代替品や輸入品によって木材価格が低迷したことで林業が衰退し、管理が行き届かず荒れるようになりました。

また、多摩地域での調査によって、1993(平成 5) 年に約 400 頭だったニホンジカが、2002(平成 14) 年には約 2,500 頭にまで増加したことがわかっています。急増したことでエサが不足したため、本来の主食であるササの他に、人工林のほとんどを占めているスギ・ヒノキの樹皮、植林した苗木の芽や地表の雑草も食べるようになりました。シカ害が拡大したことで裸山になる森もあり、雨が降るたびに土砂が流れ出るなどの被害が発生するようになりました。



第 3 回講座で歩いた奥多摩「むかし道」の森林

豊かな森林の恩恵を受けてくらしている都市部の私たちができることとして、武蔵野市は2004(平成16)年から奥多摩町、東京都農林水産振興財団の三者で協定を結び、豊かで多様な森を育むための植林、「シカ侵入防止柵」の設置や植生調査を実施しています。

また、武蔵野市民に向けた自然観察・体験イベントを奥多摩の森で開催することで、くらしや産業、自然環境を、森林整備によって守っていくことの大切さを伝える取り組みをしています。

9/12(土)「水の学校サポーターミーティング」を実施しました

「水の学校サポーター」とは？

2014 年度の連続講座修了生 12 名で構成する、水の学校の企画・運営を一緒に行うグループです。

6 月から、連続講座や公開講座の運営サポートをしたり、講座内で各々の現在の取り組みについて今年度の受講生にお話してきましたが、今回のミーティングでは11/1に開催される「環境フェスタ」へのブース出展でやりたいことや今後の連続講座でできること、サポーター企画の新規講座案を話し合いました。

サポーター発！「やりたいこと」アイデア(抜粋)

【環境フェスタでやりたいこと】

- 水クイズ(問題作りから)
- 水質パックテストでいろいろな場所の水比べ
- 玉川上水、千川上水整備計画紹介の展示
- 雨水活用に関する立体的な展示、物品の展示
- 水循環すごろくの実施

【サポーター企画講座案】

- 「水の安全・水質」講座+水質検査体験
- 武蔵野市の水路・用水研究発表
- 品川シーズンテラス、芝浦水再生センター見学
- かいぼり見学会

【その他のアイデア】

- 生活目線を大事にした講座
- 下水から香水づくり！？：意外な情報を集めてアイデアや可能性を探る
- 雨水活用についてのお話を聞きたい
- 下水道がストップした時のサバイバル

9/26(土) 公開講座「日本初の近代下水道処理施設、旧三河島汚水処理場ポンプ場・三河島水再生センター見学」

旧三河島汚水処分場ポンプ場は、1922(大正 11) 年～1999(平成 11) 年まで稼働していた日本最初の下水処理施設の一部を遺構として残し、公開している施設です。ここでは、大きなごみを取る沈砂地や水量計、沈砂地を通った汚水を処理施設へと送水するためのポンプなど、一連の設備がそのまま保存されています。稼働当時は立ち入ることのできなかった地下水路にも入れ、激しい水流がぶつかる部分には硬くて磨耗にくい御影石を使っている様子や、効率よく汚水を汲み上げるために工夫が施されたポンプ管の実物なども見ることができました。建物は当時オーストリアで流行していたというセセッション様式で建てられており、赤レンガ張りが目目を引く美しい外観です。

今回の講座では、隣接する現在稼働中の三河島水再生センターも見学し、100 年前と現在の下水処理の工程を一度に見学することができる貴重な機会となりました。

参加者からは帰りの車中で、「ガイドさんの熱のこもった案内が聞けて楽しかった」などの感想をいただきました。

